
追憶

sarasa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

追憶

【Nコード】

N4844U

【作者名】

s a r a s a

【あらすじ】

「オレ」と彼の出会い。まだ「オレ」（大井川本線）しかなかった頃の話。

（前書き）

この物語は鉄道擬人化小説です。静岡県にあります「大井川鐵道」の路線を人にして物語を作っています。そう言うのが苦手な方はごめんなさい。

彼のことはよく覚えていた。何時もオレの列車に乗っていたから。初めて会ったのはいつだったか、それは覚えていない。それでも、顔を覚えるほどには乗っていた。

彼はいつも二人で行動していた。もう一人はたしか、上流のダムの工事現場のお兄さん。いつもニコニコと楽しそうに乗っていた。だから、覚えている。

すごく、幸せそうだったから。

その彼が。その日は一人で乗っていた。

街へと向かっていた。

何故か、不安そうな表情をしていた。けれど、瞳はキラキラとしていた。

彼は、金谷駅から東海道線に乗って行った。

次の日の最終千頭行。

彼は乗っていた。

乗客は彼一人。ガタンゴトンという枕木の音が響く中、彼はボックスシートの隅っこで小さく丸まっていた。

声をかけようか。

そう思ったが、そんな勇氣はなかった。

そして、終点の千頭駅に着いた。もう、すべての列車もバスも終わっている。ここからはどこへもいけない。

のろのろと列車から降りた彼は、ホームのベンチに腰をおろすと、そのまま動かなくなった。

どうしましたか？

オレは、声をかけた。初めて声をかけた。

彼はゆっくり頭をもたげると、大切な人が亡くなったんです、と小さな声で告げた。

その瞳は真つ赤だった。ずっとずっと泣いていたのだろう。

この後、どうされるのですか？

オレの問いに、彼は首をうなだれる。

オレは少し考えた。考えて考えて。

オレはこう言った。

よかったら、今夜、オレの家で呑みませんか？

彼は目を丸くした。そして、ふっと顔を曇らせる。

まずいことを言ってしまったか？ そう思った次の瞬間、彼は突然走り出したのだ。

え？ と思った。が、すぐに彼のあとを追った。

彼は客車の陰に回りこんだ。急いで駆け込むと。

そこに、彼の姿はなかった。

代わりにいたのは、一匹のたぬき。

ゼーハーと息を切らせたたぬきは、オレの姿を見つけて、ビクリと体をこわばらせた。一步、また一步とオレが近づくとつれ、身体を丸くし、大きな尻尾を抱え込み、小さく小さくなっていく。

オレは立ち止まった。

不思議な気持ちだった。怒りとか呆れとかといった感情は一切なかった。何故か、奇妙な嬉しさを感じていた。

だからなのだろうか。

ね、一緒に呑もうよ。

怯える彼の頭を、ごくごく自然に撫でていた。

「……ああ、あれから五十年も経つのか……」

大井川は縁側で星空を眺めていた。

そのひざには、いかわが丸くなって眠っていた。

少年のような小さな身体。

すうすうという寝息。

大井川は、眠るいかわの頭を撫でる。

それに反応するかのごとく、身体に似合わず大きないかわの尻尾が、ゆうらりゆうらりとご機嫌そうに揺れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4844u/>

追憶

2011年10月9日10時25分発行